No.107
2021.3.10
Wonderful Saitama

SFA NEWS

1 … 元会長・相川宗一氏、逝去　第99回全国高等学校サッカー選手権大会　昌平、2年連続ベスト8
2 … レッズレディース、リーグ優勝・皇后杯準優勝～森監督インタビュー
3 … 森監督インタビュー　続き
4 … 第14回埼玉県第4種サッカーリーグ・選手権大会
5 … 白岡SCL優勝インタビュー～3種年代の女子サッカーの現状も合わせて
6 … 白岡SCL優勝インタビュー　続き
7 … 2020年を振り返る～県シニア連盟
8 … 県シニア連盟インタビュー　続き
9 … 大会記録●県内大会　1種・シニア　●県外大会　2種・3種・4種・女子
10 … 大会記録●県外大会　女子　インフォメーション　編集後記

●発行/(公財)埼玉県サッカー協会 〒330-0074 さいたま市浦和区北浦和1-21-18雁ヶ音ビル204号室 Tel048-834-2002・Fax048-834-2004 http://www.saitamafa.or.jp/

訃報 元会長・相川宗一氏、逝去

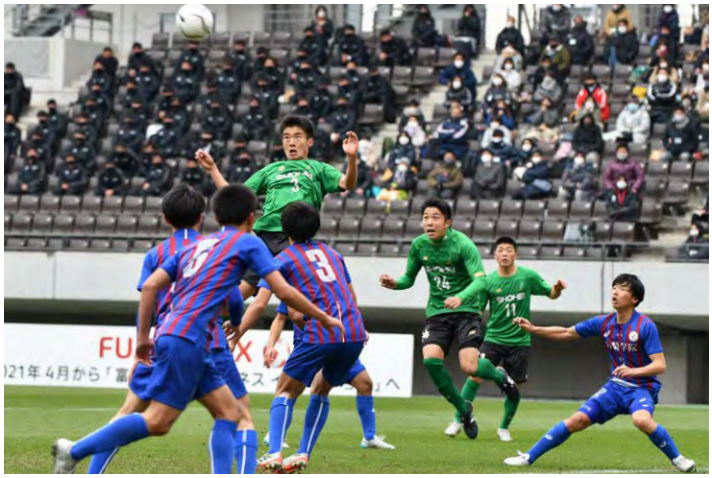
2005年から2014年までSFA会長を務められた、元さいたま市長の相川宗一氏が1月25日に逝去されました。78歳でした。任意団体だった「埼玉県サッカー協会」が、2005年7月1日に「財団法人埼玉県サッカー協会」となりました。この機に、まだ合併間もない「さいたま市」の市長という重責を担いながらも、兼務という形で会長職に就任していただきました。先々代の故・相川曹司元会長に続く、親子二代で埼玉のサッカーを牽引していただいたことに、厚く感謝申し上げます。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

第99回全国高校サッカー選手権大会
～昌平、2年連続ベスト8

新型コロナウイルスの影響により、準決勝・決勝は無観客試合になるなど異例な開催となる中、埼玉県代表の昌平高校には例年以上に期待がかかる大会となりました。初戦の高川学園戦では79分まで0－2という劣勢に立たされながらも、80分に1点を返すとアディショナルタイムで同点という劇的な試合を展開。苦しみながらもPK戦で初戦を突破したことで弾みをつけ、2回戦、3回戦と順調に勝ち上がりました。迎えた準々決勝で山梨学院と対戦、9月に「高円宮杯 JFA U－18サッカープリンスリーグ2020関東」で対した際は1－0で勝利していましたが、今回は逆に0－1と惜敗し、残念ながら四強進出はなりませんでした。

昌平のこれからの研鑽と県内各チームの底上げを期待して止みません。

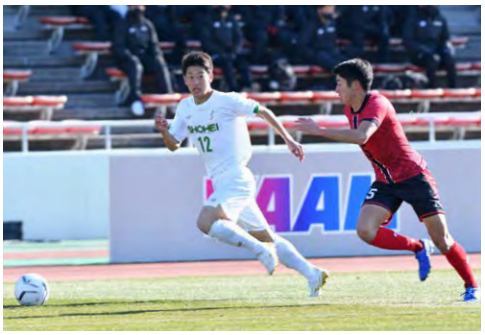
昌平高校

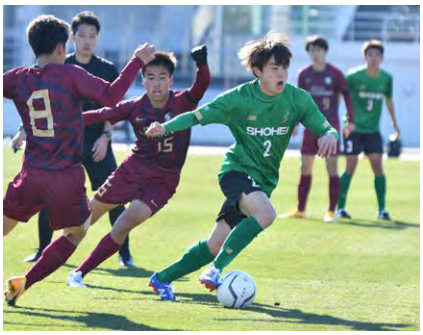

準々決勝　昌平 vs 山梨学院

第99回全国高校サッカー選手権大会
12月31日～1月11日　埼玉スタジアム2○○2 他

1回戦	昌平	2－2（8PK7）	高川学園
2回戦	京都橘	0－2	昌平
3回戦	昌平	3－0	創成館(長崎)
準々決勝	山梨学院	1－0	昌平

※優勝は山梨学院


3回戦　昌平 vs 創成館


2回戦　昌平 vs 京都橘

1回戦　昌平 vs 高川学園

浦和レッズレディース、なでしこリーグ優勝

～森　栄次監督インタビュー

日本女子プロサッカーリーグ「WE リーグ」がスタートすることになり、浦和レッズレディースにとって、2020シーズンは最後の「なでしこリーグ1部」となりました。その最後のシーズンで見事に優勝を果たしてくれたことは、埼玉のサッカーファンに大きな喜びをもたらしてくれました。遅くなりましたが、森監督に喜びの声、そしてプロとなる女子サッカーへの期待を伺いました。（聞き手／広報委員・荒川裕治）

中盤を少し厚くすることを考えた

—遅くなりましたが、リーグ優勝、おめでとうございました。

森　ありがとうございます。

—新型コロナウイルスで厳しい社会情勢の中、埼玉に明るい話題を提供していただいたこと、本当に感謝しています。

森　多くの人たちがレッズレディースを応援してくださっており、その恩を少しでも返さないといけないと常々口にしていましたので、このリーグ優勝で少しはお返しできたのではないでしょうか。

—いやいや、少しどころではないと思っています。

森　そうですか、ありがとうございます。地元浦和で優勝を決めることができたことは本当にうれしいことでした。でも、本来ならばずっと応援してくださっていたファン・サポーターの皆さんと喜びを分かち合いたかったですね。このコロナ禍では仕方のないことではありますが、ちょっと違った、ちょっと静かな優勝でした。

—このコロナ禍、確かに喜びを表現するのは難しかったと思います。さて、長く日テレ・東京ヴェルディベレーザの監督をされていて、毎年何かのタイトルを取っていらしたと思います。浦和に来て、2年目。念願のタイトルでした。やはり感触は異なるものでしたか？

森　ベレーザ時代の優勝と今回の優勝は全然違います。というのは、ベレーザではしっかりと下地ができていて、監督はそこにアクセントをつけるくらいのイメージでした。チームとしても個人としても、ある程度できあがっているわけです。

　それがレッズの場合だと、正直言うと、今までやってきたことと真逆なところがあって、トライをする中で「これで結果が出るのだろうか」という不安もあったんです。でも、この中で結果を出すことができたので、自分としても自信を持つことができました。また選手を見ていても、楽しそうにやってくれているのがわかったというのは、収穫でした。

—そこは詳しくお聞かせください。そもそもレッズレディースに対してはどのような印象をお持ちでしたか。

森　自分のイメージですが、レッズは前（FW）と後（DF ライン）が強固という感じがありました。対戦して感じていたのは、わりとすぐに前にボールを集めて、あまり中盤を意識していないイメージでした。そんな中で、私はもう少し中盤を厚くしようとトライをしたのです。そこを自分としては変えたかなと思います。

—試合を見て思ったのは、誰もがパスコースをイメージして共有できていることでした。パスサッカーというか、ポゼッションサッカーというか。流動的にプレーしながら狙い所がはっきりしているサッカーという感じがしました。そこが変化でしょうか。

森 栄次 監督

森　それは意識させてきたことですね。あまりポジションにこだわらずに、ボールに対して近い選手が行く、スペースに行くという感じですね。例えばトップの菅澤（優衣香選手）がボランチまで下がってきて、そこでボールを取られてしまったら「そこでボランチの仕事をしなさいよ」という意識付けはしてきました。

　ボールも回したいし、人も回したい。あとはどこにスペースがあるかを選手同士で共有できれば相手のスペースに穴ができるから、そこを攻めていこうという共通認識はできていましたね。

「一人ひとりのいいところを出させてあげられるのか」

—それが中盤を厚くしていこうという意識とリンクしたわけですね。

森　まさにその通りで、中盤をかき回したいというか、中盤を意識するというか。最終的に向こうのＤＦラインをどう突破して得点をするのかというのがサッカーの面白みです。それを彼女たちに伝えることができたと思っています。

—なるほど。さらに感じたのは、サイドチェンジの意識でしょうか。右サイドバックの清家貴子選手がうまくスペースに入っていく場面を多く拝見しました。先程の「穴」ではありませんが、そこに彼女が入っていき、フィニッシュに持って行ってくれるのを見るのは楽しかったですね。

森　こちらの狙い通りですので、そういっていただけると嬉しいですね。例えば、わざと左サイドに人を集めておいて、右サイドの清家がその穴に入っていってセンタリングなり、シュートなりというのは、一つの武器だと思っています。それは彼女の特徴でもあり、チームの特徴でもあったかなと思っています。

—さらに言えば、清家選手はＦＷでしたが、監督に就任されて彼女を右サイドへコンバートされたわけですね。選手をフラットにご覧になったんだなというのが理解できました。その中で彼女たちの能力を引き出したのではないでしょうか。

森　そうですね。まぁ、目をつぶらないといけない部分もありましたけどね（笑）。清家の場合だと最初はディフェンスがメチャクチャだったんですよ。そこは目をつぶって、彼女のいいところを出そうということでコンバートしたのですが、周りの他の選手たち、長船（加奈選手）とか南（萌華選手）とかがカバーしてくれて助かりました。みんなで「清家のいいところを出そう」という意識が高まりましたね。それによって、選手誰もが「一人ひとりのいいところを出させてあげられるのか」を意識できるようになりました。

　そういう意識って、自分に帰ってくるんですね。そういう話は彼女たちにしました。

—それが選手たちにとって「楽しい」と思ってプレーできた理由でしょうし、見ている我々もサッカーが面白い、楽しいと感じることができたのだと思います。

森　ありがとうございます。私自身、試合を見ている人が引きつけられることはすごく意識していますし、すごく大事なことです。そうしないとお客さんって、試合を見に来てくれません。レッズレディースの面白みというか、サッカーの面白みというのは、もっと伝えていかなければいけないと思っています。ましてや「WEリーグ」が始まるわけですし、浦和の皆さんは目が肥えているので、そういうものを見せていけるようにみんなで努力をしていかなければならない

と思っています。

──それだけに皇后杯も期待していました。

森　すみません。終わりよければすべてよしじゃないですけれど、最後に勝って締めたかったですよね。でも、ベレーザさんは強かったなと思います。まぁお互いに、いいところを出し合った試合だったと思うので、お客さんも喜んでくれたのではないでしょうか。

　お互い、自分のチームのストロングな部分が出せたと思っています。出し合って、ぶつかっていくというスタイルのほうがお客さんは喜んでくれると思いますし、面白いですよね。これまでベレーザさんや、INAC（神戸レオネッサ）さんが先頭を走ってくれていました。これからレッズレディースも、もっとがんばらなければなりませんね。

今の選手たちには責任がある

──森監督が目指すサッカーとしてはまだ道半ばだと思っていますので、これからのレッズレディースを楽しみにしています。

**　さて最後に「WEリーグ」、女子サッカーのプロ化がスタートします。その中で森監督がお考えになっている「プロ」とは何か？　「プロ論」をお聞かせいただけますか。**

森　Ｊリーグの開幕時期とリンクするのですが、やはりもっと裾野が広がっていかなければいい選手は輩出されません。もっと女の子がサッカーを楽しめる環境ができなくてはならないと思っています。プロができるというのは、今がんばっている選手たちにとってモチベーションが上がることだと思っています。

　そこでこれからプロとして生活していく選手たちに対してですが、これからはお金が関わってきます。個人、自分自身を売っていくことになります。個人の感覚や技術、考え方もそうでしょう。移籍も多くなります。サッカー中心の生活になるわけですから、そのためにどのようにコンディションを作っていくのかは選手に求められる部分です。チームとしても結果を求められますが、選手個人としても結果を求められるようになります。こういうマネジメントも監督の仕事になってきますね。

──プロ選手には、そういうセルフマネジメントができるよう、子どもたちのいいお手本になってほしいと願っています。そのためには選手本人だけでなく、周りの環境も含めて考えなければなりませんね。

森　女子のサッカーが変わるということは、世間の見方が変わるということです。大人たちにもっとサッカーへの理解を求めていきたいですし、環境整備をしていかなければいけませんね。その中で選手たちがいいパフォーマンスをしてくれて、子どもたちが魅了されて「もっとサッカーやりたい」という流れを作っていきたいですね。ですから、今の選手たちには、子どもたちがもっと成長できる土台を作っていく責任があると思います。

　そう、見本にならないといけませんね。サッカーもそうだし、私生活もそう。プロとしての振る舞いも求められます。これからはアマチュアじゃないですからね。我々もしっかりと指導していかなければなりません。

　皆さんの期待には応えていきたいと思っていますし、その期待を大事にしたいと思っています。

──今回、何度も「期待」という言葉を口にされましたが、レッズは他のチームとは違いますか？

森　全然違います。熱い。ありがたいですよ。

──「WEリーグ」の1年目、ぜひ優勝をお願いします。

森　そこを目指して、がんばります。

──今回はありがとうございました。

※2/9、浦和レッズレディースの新体制が発表され、森栄次監督は総監督に就任し、新監督には楠瀬直木氏が就任しました。

第14回埼玉県第4種サッカーリーグ・選手権大会
～12月13日に王者決定！

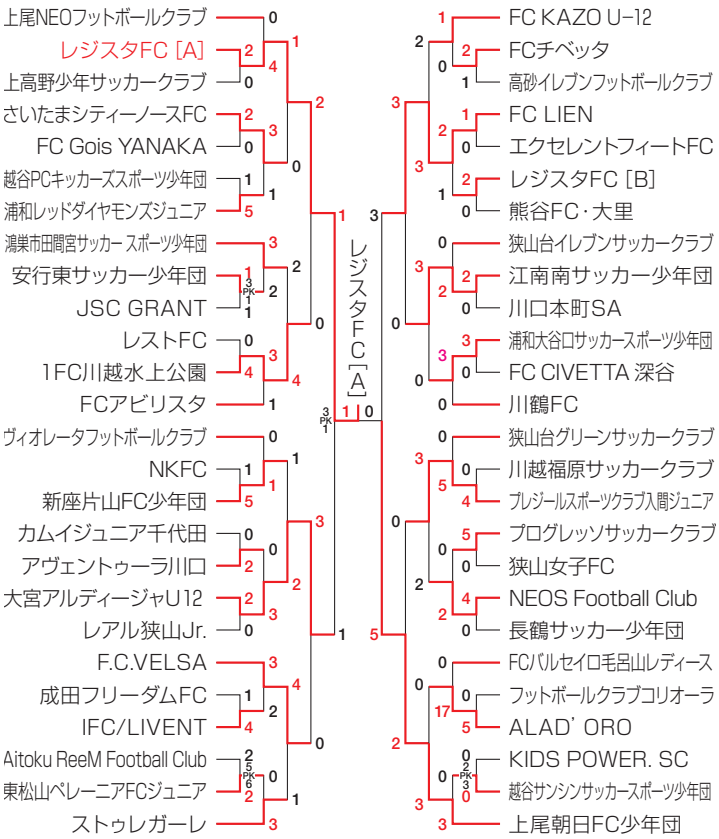
12月13日に埼玉スタジアムで準決勝と決勝が開催されました。コロナ感染拡大防止のため、例年スタジアム公園で同時開催されていた各種イベントやリーグ戦表彰式は中止に。決勝戦ではレジスタFC（A）が昨年覇者の上尾朝日FC少年団を僅差で退け、443チームの頂点に立ちました。

主　催　（公財）埼玉県サッカー協会
主　管　（公財）埼玉県サッカー協会第４種委員会
後　援　埼玉県／ NHK さいたま放送局／テレ玉
FM NACK5 ／埼玉新聞社
協　賛　埼玉縣信用金庫
特別協力　URAWA REDS

準決勝　レジスタFC［A］vs 大宮アルディージャU12

決勝　レジスタFC［A］vs 上尾朝日FC少年団

準決勝　上尾朝日FC少年団 vs FC LIEN



表彰式

鈴木会長より優勝カップ、賞状の授与

優勝したレジスタFC［A］

白岡SCL、初出場初優勝！

～JFA第11回全日本U−15女子フットサル選手権大会

年明け早々にうれしいニュースが飛び込んできました。女子チームとして活躍している白岡SCL（白岡サッカークラブレディース）がフットサルで全国優勝してくれました。それも初出場初優勝。喜びの声を小島哲広監督に伺いました。合わせて中学生年代の女子サッカーの現状もお聞きしました。

学校の部活で難しくても、地域のクラブならできるかもしれない

—まずは、優勝おめでとうございます。新型コロナウイルスでサッカーの話題が寂しい中、全国大会で優勝していただいたことは、本当に喜ばしいことです。

小島　ありがとうございます。

—今日、初めてクラブグラウンドに伺いましたが、いい環境で子どもたちは練習していますね。

小島　自分たちで自由に使えるグランドを持つというのは街クラブにとって夢の一つだと思います。たまたま、親切な地主さんと出会うことができて、整地から始まり、少しずつ広げていきました。小学生用のコートですと3面ほどになります。最初からこの大きさで考えていれば、大人用のコートができたのですが（苦笑）。今は、中学生の男女、小学生とカテゴリー別に使用していますので、これはこれで良かったと思っています。

—すべて人工芝。成長するにはいい環境だと思います。最初に、『白岡SCL』より以前に、男子のクラブを立ち上げたきっかけを教えてください。

小島　もともと私は福岡出身で、大学進学のため埼玉に来ました。サッカーをしているものにとって、埼玉は憧れでした。現在は、中学校の英語教諭をしながらサッカー部の顧問をし、このクラブの代表をしています。

今、埼玉県東部の白岡に住んでいますが、小学生の子どもたちが毎年たくさん中学校の部活に入ってくるわけではありません。3学年合わせても11人に満たない年もあります。たくさんの子供たちにサッカーを楽しんでほしくて、20年以上前になりますが、近隣の地域でサッカー少年団を立ち上げました。そこから中学でもサッカーを続けてもらう環境を整えようと考えました。小学校でも中学校でもたくさんの子供たちがサッカーを楽しんでくれるよう少しずつ変化してきましたが、我々につきものの異動で学校を離れなければなりませんでした。そうなると部活が縮小したり、無くなったり……。

そういうことを繰り返す中で、子どもたちが卒業しても帰ることができる場所、またボールを蹴ることができる場所が欲しいと考えるようになりました。学校の部活で難しくても、地域のクラブならできるかもしれない。社会人になっても、さらにシニアになっても、同じグラウンドでサッカーができるようになればいいなと。そのためには施設がほしいと思い、2003年にクラブを立ち上げ、2年目にまだ土でしたが、この場所でグランド造りをスタートしました。女子の白岡SCLは2005年から活動しています。

女子の県リーグは3部まであり、中学生から大学、社会人までが一緒にプレーできています。そこでウチのクラブは県1部に2チーム所属しており、鍛えてもらっています。中学生たちが高校・大学・社会人の選手たちを相手にできること、いいですよね。夢があります。

足を止め、じっとボールを眺めていました（笑）

—そういう思いが、こういう結果につながったということは、やはり素晴らしいことですし、正直なかなかできることではありません。

さて、今回の優勝はサッカーではなく、フットサルでした。まずはフットサルのことをお聞きしたいと思います。そもそもサッカーチームとして活動する中、どうしてフットサルの大会に出場するようになったのでしょうか。

小島 哲広 監督

小島　もう6年前になりますが、県フットサル連盟の方から誘われて参加したのが始まりでした。当時のフットサルの県大会は、サッカーチームがいくつか参加して開催されていました。最初の年は負けてしまいました。でもフットサルの大会に参加するようになった次の年に、サッカーで初めて全国大会に出場することができました。実際はそれがきっかけで、ここまで続けて参加しています。

フットサルは目まぐるしく攻守が切り替わります。試合を経験する中で、子どもたちがその早さを学んでいくことができます。するとサッカーでも、同じように攻守の切り替えが早くなっていくのを感じました。

フットサルだと、タッチラインからボールが出たら4秒以内にキックインしてプレーを再開しなければなりません。試合を続けていくことで、自然にクイックスタートが身につき、相手選手が整う前にプレーするようになっていきました。まさにフットサル効果でした。

今回の全国大会でもそうでしたが、相手に考える時間とスペースを与えてしまうと、普段サッカーの試合ではあまり経験しないような早いパス回しに翻弄されてしまいます。パス交換しながらグルグルとポジションチェンジをされたりすると、ウチの選手たちは足を止めじっとボールを眺めていました（笑）。だから、まずはハイプレス。何度も出入りできる交代のルールを利用して、リトリートせず前からすべて行くことにしました。コートそのものが狭いので、高い位置からプレッシャーをかけてボールを奪ってシュート。確かにリスクが高く、カウンターによる失点も多かったのですが、それでも引いて守ることはほとんどしませんでした。低い位置でボールを奪ってもまずはゴールを目指します。縦やななめ前へのパスを優先しダメなら次の選択肢へ。キーパーへのバックパスが制限されるフットサル特有のルールも、ウチの選手にとっては早い試合展開を楽しめる要因の一つとなりました。

振り返ると今回の関東大会はすべて1点差での勝利でした。守備時に一番苦手としていたのが、相手GKを含めた5人でボールを保持しながら攻め込んでくる攻撃でした。数的不利になると上手くボールにアプローチできずにズルズルと下がってしまい失点を繰り返していました。それでも恐れずボールを奪いに行き、粘り強く戦うことで、残り数秒での逆転勝ちという試合が続きました。

また、男女交互に試合をするので、休みながら男子の試合を観戦

し、戦術やセットプレーを学んで次の試合でさっそくやってみては失敗のくり返しでした。

──大会に出場し、学びながら勝ち上がっていったわけですね。

小島　そうですね。あとは、男女の差で大きいものとして、キックや浮き球の処理（空中戦）だと思います。この二つについては、ウチの選手たちがもっとも得意としているものです。男子は、ボールの落下点を予測し移動することは自然にできることが多いのですが、女子は浮き球自体を苦手に思う選手が多く、最初からできる選手はほとんどいません。ですが、トレーニングさえすれば、落下点に移動し相手と怖がらずに競り合うことも可能です。

キックに関しては左右とも相当練習させています。先程、フットサルの試合でミドルシュートを狙う話をしましたが、かなりの精度で決めてくれています。ただ、フットサルの場合、関東大会ではそれだけでは通用しませんでした。そこはクラブとして長い時間かけて取り組んでいるドリブル、個の突破の意識が生きるところです。縦へ突破してワンツーからの得点が次に多い得点パターンとなりました。

──当然、勝つことで子どもたちは成長していくわけですよね。

小島　全国大会の話になりますが、ハート面ではたくましくなったと思います。関東大会に続き、全国大会でも逆転勝ちで進んできました。クラブのコンセプトである粘り強く、最後の1秒まで全力を尽くすプレーで勝つことができ、それが自信につながりましたね。試合中、負けていても「粘り強くいこう」と選手同士ベンチから声をかけあい、選手が入れ替わりながらコートに出ていきましたから、チーム全体の底上げができたと思っています。

環境整備とWEリーグへの思い

──少し、フットサルの環境についてお聞きしたいと思います。サッカーの日程がある中でフットサルもという状況ですよね。

小島　そうです。ただ、以前立ち上がったU−15女子のフットサルリーグは無くなってしまいました。日程的に窮屈ではないのですが、大会費用の問題がありますね。大会などは1回戦で負けても、2〜3万円かかります。施設利用料や審判派遣費など理解はしますが、中学生にとってはかなりの高額です。以前は社会人のフットサルリーグに参加していましたが、こちらもやはり高額ということと、試合日は一日拘束されてしまうということから辞めてしまいました。もっと気軽なリーグになれば、フットサルそのものが普及していくと思います。

一ついいですか？　気軽にできる環境が必要という話の流れからですが、そもそも街クラブの意義って、この年代の女子をどう育てるかにあるような気がしています。例えばですが、埼玉の女子選手には、放課後、時間をかけて遠方のクラブまで通う選手がたくさんいます。県外へ通っている選手もいることでしょう。確かに、女の子たちはすごいですよ、こうと決めたら行動力とかパワーがあります。何時間かけてでも、お気に入りのクラブに通っています。でもそれは、彼女たちにとってはけっしていい環境ではありません。改善していきたいものです。

JFA 第11回全日本Ｕ－15女子フットサル選手権大会

中学校の顧問をしているから思うのですが、放課後になってすぐにボールを蹴ることができる環境というのは、素晴らしいことです。勉強や学校生活と同じように、やはりサッカーが日常生活の一部になってほしいです。そのためには学校で、それが無理ならば一つの街に一つの女子クラブがあってほしい。ならば、彼女たちのようにサッカーのために遠くまで通う環境を変える力は我々街クラブにあるのではないでしょうか。

──まだまだ少ないということですね。「できる」環境をどうやって増やすことができるのか。もう少し踏み込んで考えなければならない課題です。

小島　確かにクラブを新たなに立ち上げるのは大変なことです。

選手たちを見ていると、女子選手には「自分のやりたいサッカー」への強い思いがあるのではないでしょうか。だから、今以上に多くの街クラブができても、個々のブランド、クラブとしての個性を出していくことができれば、それぞれが共存し戦っていけると思います。

あと練習会を行う際や練習時の送り迎えを見ていると、男子はお母さんが、女子はお父さんが来ることが多いです。お父さんたちはサッカー経験者やサッカーの指導者をされている方が多く、いつも厳しい目で練習を見て下さっています。そんな保護者の方々からも、このクラブに所属させて良かったと言ってもらえるよう、これからも努力していきます。

ただ、女子チームのマネジメントは大変です。大変だからこそ、規律は厳しくしています。学校生活を第一に考える、勉強はおろそかにしない……ボールを蹴る以前に、生活面に対して気をつけさせることは、クラブとしての色になっています。多くの選手が、高校に進み中学では経験しなかった「初めての部活動」でサッカーをすることになります。クラブに慣れている選手たちにとって「部活動」は本当に厳しいものです。そこで苦労しないように育てたいと考えています。また、選手たちの自立ため、保護者の皆さんには「手を離して、目は離さないでください」とお願いしています。

──指導者の意識次第ですね。さあ、これから「WEリーグ」が開幕します。最後に「WEリーグ」への期待をお願いします。

小島　埼玉から3チームも参加することになり、女子選手たちには夢が広がると思います。しかし現状で「JFA U－15女子サッカーリーグ 2020 関東」を見ると、8チームの1部制。参加しているチームは関東大会にはシードされています。ですが、そのほとんどが、現在なでしこリーグの下部組織ですから、街クラブがそこに入っていくことはかなり難易度が高いことだと思っています。これも課題なのですが、女子はチーム数が少ないので、県内大会の規模が小さく、強化のためには県外遠征が不可欠です。数少ない県外チームと公式戦で戦える場が少ないというのは試合環境の再考が必要となるでしょう。せめて、公式戦ではないものの緩やかなリーグ戦が必要となると考えます。

これから「WEリーグ」に参加するクラブのアカデミー、下部組織のチームとは、それぞれがライバルという位置づけです。ただ、クラブとしてこれまでは定員に対して先着順で入ってもらっていましたが、2020年から当クラブで初めてのセレクションを行うことにしました。これにより、さらに一つ上のステージで戦えるのではないかと楽しみにしています。でも、たとえ中学校からサッカーを始める選手でも、高校で十分通用する選手へと成長することができます。たくさんの可能性を秘めているのがこの年代の女子の特徴です。このことは今後も大事にしていきたいと考えています。

とはいえ、やはりまだまだチーム数が少ないのが課題です。チーム数が多くなることが全体的に底上げとなり、「WEリーグ」にもつながると考えています。そのためには、先程お話ししましたが、もっと女子の街クラブができていいと思います。サッカーが皆さんの生活の一部になりますように。我々も、引き続き努力していきますので、よろしくお願いいたします。

──ありがとうございました。

JFA 第11回全日本U－15女子フットサル選手権大会

1月10日、11日　三重県営サンアリーナ

●1次ラウンド・グループC

白岡SCL　3－1　名古屋FCルミナス

旭川女子アチーボ　0－4　白岡SCL

※白岡SCLはグループ1位

●決勝ラウンド

準決勝　白岡SCL　7－2　AICシーガル広島レディース

決勝　白岡SCL　4－3　名古屋FCルミナス

優勝　白岡SCL

2020年を振り返る ～県シニア連盟

新型コロナウイルスの感染はまだ終わりが見えません。そんな中、県シニア連盟はどのような対策を取りながら、リーグ戦を始めたのでしょうか。さらには今後の展望も含めて、秋谷仁会長兼理事長と樫村憲二副理事長に伺いました。

フローチャートにキット配布

――新型コロナウイルスの感染状況を考えると、一番慎重になっていたのはシニアの皆さんだったと思います。

秋谷　通常の開幕は3月からですが開幕できず、世の中的には「6月から」という雰囲気でしたよね。ただシニアの皆さんの体調を考えるとコンディションは整っていないでしょうし、その時点からの開幕だと熱中症の危険も伴います。あと8月はそもそも試合をしません。ということで、9月まで我慢してスタートしようと判断しました。

各カテゴリーでJFAの再開指針に合わせ、さらに厳しい条件を付けてのスタートすることとし、感染した際に重症化を懸念してオーバー65、70については中止。オーバー40、オーバー50、オーバー60のリーグのみの開催としました。

樫村　結果、シニア登録は2100名あまりいますが、新型コロナウイルスに感染した方は1名のみ。それもリーグ戦とは関係のないところでの感染でしたので、運営的にはホッとしました。御本人も発症後2週間ほど療養されて回復されています。

――よかったですね。リーグは予定通りに終了されましたか？

秋谷　オーバー40は終了しましたが、オーバー50は天候不良のため延期になったので、もう少しです。あとは最後の上位が対決するチャンピオンシップです。2021年度の全国大会関東予選会と関東大会出場がかかっているので、最後の最後ですね。

――さて、感染者の情報はどのように収集されたのでしょうか。

樫村　各チームで感染者もしくは濃厚接触者が出た場合の対応については、私がフローチャートを作成し、シニア連盟会員に配りました。

秋谷　残念ながら、JFAもSFAも「こうなったときにはこうすればいい」という具体的な指針がありませんでした。シニアの選手たちは家庭もあり、仕事もあり、さらに高齢者でもあるので、より具体的な指針が必要です。そこでシニア連盟独自に作成したのです。

――シニアが一番神経質にならなければならない年代ですね。

秋谷　そうなんです。部活であれば中止と言えば中止になるでしょうが、我々は自分たちで引き締めなければいけません。ですから、今回は家族からサッカーをしてもいい、試合に参加してもいいという同意書をもらいました。いくら自分でプレーしたいと言っても、家族の賛成、了承がないとプレーさせませんよと。

――なるほど。さらに試合当日も体調を報告する仕組み、ルールもあるんですよね。

樫村　オーバー40は試合当日の起床後30分以降に検温した数字を専用フォーマットに、オーバー50は試合会場で検温した数字をメンバー表に記入することを義務づけて徹底しました。

秋谷　常に検温ですよ。
樫村　各リーグの運営担当者に感染予防キット一式を送ってお願いしました。
――キットとは？
秋谷　47FA への新型コロナウイルス対策の補助金を利用して、非接触の体温計と消毒液、そしてペーパータオルなどの一式です。各方面の皆さんに御協力いただき、なんとかかき集めました。ただ非接触の体温計はエラーが多くて御迷惑をおかけしました。でもあのときは、モノを揃えるので精一杯でした。
――一時的でしたが、品不足でしたからね。あとフローチャートはどのように作成されたのでしょうか。
樫村　私の勤務先にご家族が感染した方、濃厚接触者の方がいましたので、ヒアリングしながらまとめました。感染の疑いを持ったときにどうしたのか。保健所でどういう指示をされたのかなど……。
――なるほど。本当に具体的なものだったんですね。
秋谷　実は本当は今年のリーグ戦は中止しようと思ったんです。
樫村　でもやりたいんですよ。私も選手です。でもオーバー40の理事ですし、連盟の副理事長でもあります。やれるようにするにはどうすればいいのかを他の運営理事メンバーとことこと考えました。
秋谷　シニアのサッカーは、趣味の世界ですからね。でも、皆さんの「やりたい」を止めることはできません。
樫村　そもそも「明日、サッカーができなくなるかもしれない」と思っている人たちが大多数です（笑）。それは新型コロナウイルスに感染するかどうかではありません。だから「明日やりたい」という人たちの集まりですから、なんとか試合ができるようにしたかったというのはあります。正直「こうすればいい」という正解はありません。しばらく、しっかり検温や手指消毒などの感染予防対策を続けながら、やっていくということなりますね。

シニアにも【旬】がある

――そんな中、明るい話題として FC 西武台シニアが「JFA 第8回全日本 O－40サッカー大会」で3位と健闘してくれました。
秋谷　関東大会が開催できなかったことから抽選で関東から3チーム、全国大会へ出場することになりました。まずその抽選で引き当てたことがラッキーで、かつそれも関東第1代表になったことも幸いしました。
　ただ、試合でのラッキーはなく、実に堂々と戦い、素晴らしいチームでした。優勝できるんじゃないかと思って見ていましたからね。
樫村　準決勝での横浜シニア戦は最後の最後で失点してしまい、無念の敗退でした。田畑選手（昭宏氏・元浦和）も活躍していました。
――最近、JFA のホームページでシニアの結果を確認していると、名のある人たちが出てきていますね。元Jリーガーもですが、元日本代表とか。埼玉はどうなのでしょうか。
樫村　東京とか神奈川には多くいらっしゃいますね。

秋 谷 仁　会長兼理事長

秋谷　シニアでプレーを続けるよりも指導者の道に進んでいる人が多いということだと思っています。やはりアマチュアとはいえ、選手を続けるにも社会人としての環境が必要です。
樫村　チームに残るのが難しい状況ではあるでしょうね。
秋谷　そうなんですよね……シニアだけでなく、埼玉のチームなんですから、全てのカテゴリーで日本一になってほしいと願っています。そのためにはどうすればいいか？シニアだけのことで言えば、もっと競技性の高いリーグを立ち上げることが必要なのではないかという議論を始めたところです。
　もちろんシニアはエンジョイも必要です。でも競技で、真剣勝負でも日本一を目指すというチームが出てきてもいいと思うのです。そういうチームが出てきて、勝ってくれることが“おらが代表”ではないのですが、誇りになると思うんですね。

樫 村 憲 二　副理事長

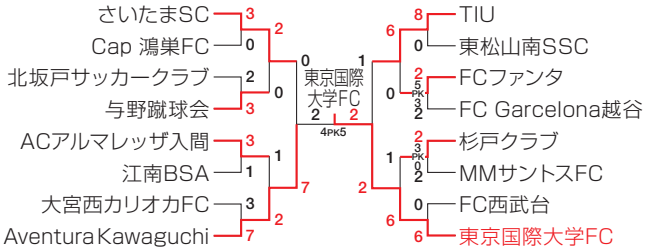
樫村　先程、元プロがシニアに参加してきているという話がありましたが、この数年で急激に全国大会のレベルが上がっています。先日の「JFA 第8回全日本 O－40サッカー大会」も衝撃的でした。個人的には1種の関東リーグぐらいのレベルにも思えたほどでした。
秋谷　ホント、びっくりしましたね。
樫村　確かにシニアでプレーしている選手でも、まだ1種のチームに残ってプレーしている選手が多いので、競技性は高くなっていますよね。実際、県内のオーバー40の試合を見ていても、レベルの乖離が始まっています。だから、分離したいという議論につながっています。（2020年は、オーバー40は1部、2部、さらに3部はA、Bで構成されている）。
　現在、オーバー40のチーム数は40チームあり、来シーズンはさらに増え42チームになり、4部リーグまで作れる状況にあります。新たにシニアチームを発足した場合、まず4部からスタートすることになりますが、順調に1部に昇格するには3年はかかってしまいます。それだと、選手としての【旬】が過ぎてしまうんですね。
――【旬】ですか。
秋谷　そう、【旬】があるんです。シニアでプレーする人たちの現状として、もともと1種でもやっていて、競技性を求めている人もいれば、「子どもがサッカーを始めたから」と自分でも始めた人たちもいます。この両方の人たちが満足できるリーグを作るのは、なかなか難しいことです。
　また先程、樫村さんが御自身のことをおっしゃっていましたが、シニアは運営している役員も選手なんですよね。指導者と選手が分かれているわけでもありません。大人と子どもという境がありませんから、それこそシニアに対する考え方は登録している選手の数だけあるのです。
　県内におけるシニアチームの傾向ですが、以前ならば地域的なつながりによって選手が集まってチームが構成されていました。それが最近というか、今のリーグの上位チームは横のつながり、高校とか大学で一緒にプレーしていた人たちで集まっています。チームを見ると傾向がわかりますね。FC 浦和シニアのオーバー50だったら、高校は浦和南、大学は明治の選手が多いようです。
樫村　同窓会的なチームも増えてきています。あとチームを移籍する選手も出てきています。中には中四国や関西、東北などの転勤先から週末に戻ってきてプレーする選手もいます。
秋谷　サッカーのついでに自宅に戻るという人、いますね（笑）。
――今回、コロナ渦でのリーグ運営について伺いましたが、これからのシニアについても触れていただき、ありがとうございました。確かに、エンジョイと競技性の両立は難しいことです。ただ、全てのカテゴリーで埼玉のチームが優勝してほしいというのも願いです。
　今年はこういう夢のある話題でもっと議論していきたいですね。今回はお忙しい中、ありがとうございました。

大会記録●県内大会

1種・社会人

令和3年度 彩の国カップ埼玉県サッカー選手権大会
埼玉県社会人サッカートーナメント会長杯 決勝ラウンド

1月10日～2月22日

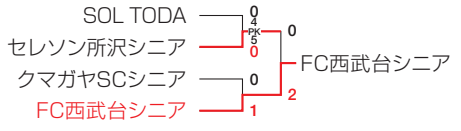


※優勝は東京国際大学FC

シニア

2020年度 埼玉県シニアサッカー連盟O-40代表決定戦

1月24日、31日　熊谷スポーツ文化公園陸上競技場他



※優勝したFC西武台シニアは「JFA第9回全日本O-40サッカー大会関東予選会」に出場。準優勝のセレソン所沢シニアは「KTFA第14回関東O-40サッカー大会」に 出場する

埼玉県O-50サッカーリーグ1部（全日程終了）

順位	チーム	勝点	勝	分	負	総得点	総失点	得失差
1	所沢	33	11	0	0	37	2	35
2	浦和シニア	33	10	0	1	33	4	29
3	パルス	19	6	1	4	17	15	2
4	川越	17	5	2	5	9	11	−2
5	NTT	16	4	4	3	15	13	2
6	川口	15	3	6	2	12	10	2
7	越谷	14	4	2	5	11	12	−1
8	上尾	14	4	2	5	12	14	−2
9	神明	13	3	4	4	9	14	−5
10	市高	7	1	4	6	6	12	−6
11	東松山OP	4	1	1	9	6	32	−26
12	本庄	2	0	2	9	2	30	−28

埼玉県O-60サッカーリーグ（全日程終了）

順位	チーム	勝点	勝	分	負	総得点	総失点	得失差
1	パルス	24	8	0	1	24	4	20
2	FSC	16	4	4	1	11	3	8
3	浦和GP	15	4	3	2	9	7	2
4	比企FC	13	4	1	4	11	11	0
5	サウスフレンズ	13	4	1	4	11	14	−3
6	春越	12	3	3	3	12	10	2
7	ベアーズ	11	3	2	4	10	16	−6
8	ポラリス	10	3	1	5	14	11	3
9	FC OKT	10	2	4	3	11	9	2
10	OKG	1	0	1	8	1	29	−28

大会記録●県外大会

2種・クラブ

第44回 日本クラブユースサッカー選手権（U-18）大会

12月25日～30日　群馬県立敷島公園サッカー・ラグビー場他

1回戦	京都サンガFC U-18	0 − 0（8PK9）	大宮アルディージャU18
	浦和レッズユース	辞退	ブラウブリッツ秋田U-18
2回戦	大宮アルディージャU18	0 − 0（5PK3）	栃木SC U-18
準々決勝	大宮アルディージャU18	2 − 0	横浜F・マリノスユース
準決勝	FC東京U-18	0 − 0（4PK3）	大宮アルディージャU18

※優勝はサガン鳥栖U-18

3種

高円宮杯JFA第32回全日本U-15サッカー選手権大会

12月12日～28日　味の素フィールド西が丘他

1回戦	FCラヴィーダ	2 − 1	宇治FCジュニアユース
	サガン鳥栖U-15	辞退	大宮アルディージャU15
	浦和レッズジュニアユース	4 − 0	ジュビロ磐田U-15
2回戦	FCラヴィーダ	1 − 0	ファジアーノ岡山U-15
	徳島ヴォルティスジュニアユース	1 − 2	浦和レッズジュニアユース
準々決勝	FCラヴィーダ	0 − 0（3PK4）	サガン鳥栖U-15
	セレッソ大阪U-15	2 − 6	浦和レッズジュニアユース
準決勝	浦和レッズジュニアユース	2 − 2（2PK4）	鹿島アントラーズつくばジュニアユース

※優勝はサガン鳥栖U-15

4種

JFA第44回全日本U-12サッカー選手権大会

12月26日～29日　白波スタジアム他

●1次ラウンド・グループA

福岡西FA	3 − 2	江南南SS
鳥取セリオ	2 − 6	江南南SS
松川SSS（福島県）	1 − 5	江南南SS

※江南南SSはグループ2位でラウンド16へ進出

●ラウンド16

FCトリアネーロ町田	4 − 0	江南南SS

※優勝はFCトリアネーロ町田

女子

皇后杯JFA第42回全日本女子サッカー選手権大会

11月28日～12月29日　サンガスタジアム by KYOCERA他

1回戦	JAPANサッカーカレッジレディース	0 − 1	FC十文字VENTUS
2回戦	浦和レッズレディース	5 − 0	FC十文字VENTUS
	ちふれASエルフェン埼玉	1 − 0	日体大FIELDS横浜
3回戦	浦和レッズレディース	2 − 0	大和シルフィード
	セレッソ大阪堺レディース	3 − 0	ちふれASエルフェン埼玉
準々決勝	浦和レッズレディース	3 − 2	ジェフユナイテッド市原・千葉レディース
準決勝	浦和レッズレディース	1 − 1（5PK3）	アルビレックス新潟レディース
決勝	浦和レッズレディース	3 − 4	日テレ・東京ヴェルディベレーザ

※優勝は日テレ・東京ヴェルディベレーザ

JFA第25回全日本U-15女子サッカー選手権大会

12月12日～28日　味の素フィールド西が丘他

1回戦	浦和レッズレディースジュニアユース	4 − 0	アルビレックス新潟レディースU-15
	FC十文字VENTUS U-15	0 − 0（3PK2）	福岡女学院中学校FC
2回戦	浦和レッズレディースジュニアユース	2 − 0	ザスパクサツ群馬レディースU-15
	大分トリニータレディース	1 − 6	FC十文字VENTUS U-15
準々決勝	浦和レッズレディースジュニアユース	2 − 0	FC十文字VENTUS U-15
準決勝	ノジマステラ神奈川相模原アヴェニーレ	1 − 2	浦和レッズレディースジュニアユース
決勝	浦和レッズレディースジュニアユース	0 − 0（3PK5）	JFAアカデミー福島

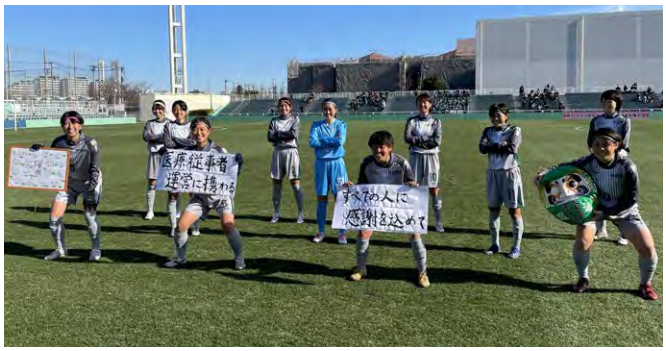
※優勝はJFAアカデミー福島

第29回全日本大学女子サッカー選手権大会

12月24日～1月6日　味の素フィールド西が丘他

1回戦	大東文化大学	7－0	北陸大学
2回戦	早稲田大学	0－1	大東文化大学
準々決勝	大東文化大学	0－0（3PK2）	聖泉大学
準決勝	大東文化大学	1－2	静岡産業大学

※優勝は帝京平成大学



大東文化大学

JFA第24回全日本U-18女子サッカー選手権大会 JOC ジュニアオリンピックカップ

1月3日～7日　J-GREEN堺

1回戦	浦和レッズレディースユース	7－0	マイナビベガルタ仙台レディースユース
2回戦	浦和レッズレディースユース	10－0	AICシーガル広島レディース
準決勝	浦和レッズレディースユース	2－0	ノジマステラ神奈川相模原ドゥーエ
決勝	浦和レッズレディースユース	2－3	日テレ・東京ヴェルディメニーナ

※優勝は日テレ・東京ヴェルディメニーナ

XF CUP 2020 第2回日本クラブユース女子サッカー大会（U-18）

1月9日～17日　群馬県立敷島公園サッカー・ラグビー場

●グループステージ・Aグループ

日体大FIELDS横浜U18	1－1	1FC川越水上公園メニーナ
水沢ユナイテッドFC・プリンセス	0－10	1FC川越水上公園メニーナ
クラブフィールズ・リンダ（北海道）	1－2	1FC川越水上公園メニーナ

※1FC川越水上公園メニーナはグループ2位

●グループステージ・Bグループ

ちふれASエルフェン埼玉マリ	8－0	ソルフィオーレFC（岡山県）
ちふれASエルフェン埼玉マリ	2－1	NGUラブリッジ名古屋アスター
ちふれASエルフェン埼玉マリ	1－2	スフィーダ世田谷FCユース

※ちふれASエルフェン埼玉マリはグループ1位でノックアウトステージへ

●ノックアウトステージ

準決勝	日体大FIELDS横浜U18	0－0（4PK3）	ちふれASエルフェン埼玉マリ
3位決定戦	ちふれASエルフェン埼玉マリ	1－3	横須賀シーガルズJOY

※優勝はJFAアカデミー福島

インフォメーション

●あいおいニッセイ同和損害保険様より県女子連盟へ寄付～寄贈式を挙行

あいおいニッセイ同和損害保険様の役職員有志の皆さまによる募金制度「MS&ADゆにぞんスマイルクラブ基金」より、県協会女子連盟へ寄付を頂戴いたしました。2月17日、埼玉スタジアム2〇〇2にて寄贈式を行い、同社執行役員・一柳若菜様、MS&ADゆにぞんスマイルクラブ理事・古殿智浩様はじめ関係の皆さまが「女性活躍に向けた支援の一環として、レディース活躍、将来のWEリーグ躍進のために」と寄付金を贈呈。懇談会では同社のさまざまな地域貢献活動をご案内いただきました。

鈴木茂SFA会長、渡辺典子SFA副会長（女子委員長）は「女子、とくに若年層の育成に活用したい」と謝意をお伝えし、県女子サッカー発展への想いを共有させていただきました。募金をいただいた同社の皆さま、ありがとうございました。

●SFAフットボールセンターの利用について

緊急事態宣言延長により、埼玉県の緊急事態措置も延長されましたことから、埼玉県サッカー協会では、引き続き3月21日（日）まで、19時から21時までのSFAフットボールセンターの貸し出しをしないことといたしました。

また、新規利用申請の受付もいたしません。今後、変更が生じた場合は改めてお知らせいたします。

皆様にはご不便をおかけいたしますが、ご理解ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

●追悼～謹んでお悔やみ申し上げます

故・吉川五郎 様

埼玉県サッカー協会の設立（1946年）、同医事委員会設立（1979年）にご尽力いただきました、吉川五郎様が1月20日、お亡くなりになりました。享年102歳。2013年には長年の選手登録継続を称え、第8回日本スポーツグランプリを受賞されました。晩年はシニア連盟の活動に参加され、多くの皆さんの目標となっていました。これまでの功績に、厚く御礼申し上げます。

編集後記

前号発行直後の1月7日、1都3県に再び緊急事態宣言が発出されました。新年を迎えたこの1～2月、各種別の新人大会が軒並み延期や中止となり、また新年度に向けた強化もままならない事態が続いています。昨年夏から秋にかけていったんはサッカーが日常に戻りつつありましたが、残念ながらまた我慢の冬となりました。皆さまのご心労いかばかりかとお察し申し上げます。

日本国内でもワクチン接種が始まりましたが、緊急事態宣言が解除されても予断を許さない状況は続くでしょう。確実に春の足音を感じる昨今、感染予防と拡大防止の生活習慣を維持しながら、少しずつサッカーのある日常を取り戻していきましょう。（藤田）